

学びのたより

2024. 4. 1

文責/JUN

つながりと学び合う学級をつくる4月

1 4月は出会いの季節

4月は、出会いの季節だ。学校が仕事場である教師にとって、それはかなり大きなことである。人事異動による教職員の入れ替わりによる同僚との出会いは、一年間の仕事のありようを左右するものとなる。ただ、教師にとってもっとも重要なのは、子どもとの出会いだ。これから一年間かかわることになる子どもたちとどう出会うか、それは、何も考えなければなんとなく過ぎていくことなのだが、実は、かなり大きな意味を持つことなのである。

本たより前号で、NHKのドラマと予期しない出会いをして、そこから、私自身の45年に及ぶ歩みを振り返ることになったことを記した。それは、テレビ番組が目に入っただけで、自分が何を大切にして生きてきたのかまでの深い心慮に至ったということなのだが、出会いというのはそれほどのことをもたらすものなのだ。そこまでのことは稀だけれど、子どもによっては、新しい年度の出会いが、その子どものその後にかかなりの影響をもたらすことがある。だから、教師は、子どもとの出会いを軽く考えてはいけない。

学級担任になった教師の子どもとの出会いは、入学式・始業式の後の「学級開き」と呼んでいる1単位時間(45分)にも満たない時間で行うことになる。

子どもたちは、今度の先生はどういう先生だろうと心ときめかせながら、子どもによっては心配もしながら席についている。「学級開き」は、そのような子どもたちのいる教室の扉を開けることから始まる。そのとき、これは前号で述べたことの続きになるのだが、教師に必要なのは、子どもの目線に立つ、つまり「子どもの内側からのまなざし」を持つことである。それはどういうことなのか考えてみることにしよう。

2 子ども目線に立つ「まなざし」を持つこと

子どもの目線に立つというと、子どもに迎合して子どもを甘やかすことになるという人がいるかもしれない。そういう人は、子どもと初めて出会う「学級開き」は、最初が肝心だからビシッとさせなければいけないと考えておられるのではないだろうか。すべての子どもが秩序正しく、勝手なことをしないで整然と学習する、それがもっとも大切なことだということなのだろう。

それに対して、私は、その出会いにおいて、子どもたちはどんな状態で、どういう思いや感情を持っていたか、それを少しでも感じ取る感覚を持たなければならない、そのことの方が重要だと言っているのだ。

人と人の関係は、たとえ、教師と子どもであっても、それぞれに思いがあり、その思いと思いが交差することによって築かれることになる。上司と部下、師匠と弟子などの関係において生まれやすいのは、権力的上下関係である。家庭によって異なるが、親子関係も、時代を遡れば遡るほどその傾向は強かったのではないだろうか。

そういう上下関係の「下」であった頃、つまり子どもだった、部下だった、弟子だった、そういう頃に自分は何を感じ、何を考えていたか思い出してみれば分かることだが、ときには不条理さを感じ、また違うときには、自分のことが理解されない憤りを感じたり悔しさを味わったりしたことのある人がいるのではないだろうか。

そういう経験がすべてよくないというわけではない。人間社会を生きていくということは、押し寄せるさまざまな波に耐えながら、自分の生きる道を見つけていくことだと思うからだ。人と人との関係はさまざまだ。だから、いろいろなことはあるだろう。けれど、子が親を敬い、部下が上司を信頼し、弟子が師匠を尊敬する、そういう関係が築けたらどんなによいかと思う。

年齢によって、役職によって、上下関係が生まれるのは一般的なことである。私が願うのは、そこに、前述したような「敬い」「信頼」「尊敬」があってほしいのだ。そのために大切なことが、その上下関係を権力的なものにしないことである。それは、ひとえに、上位に立つ者の「まなざし」にかかっているとと言える。下位に立つ人の目線に立つ「まなざし」である。

もちろん、他者の心の中まで見抜けるわけではないし、教師と子どもの関係なら、子どもは何人もいるのだから、どの子どもの目線にも立てるわけではない。私が言っているのは、完璧に立てるかどうかということではなく、その視線が持てる教師にならなければいけないということなのだ。それは、「子どもの内側からのまなざし」を持つということである。

子どもは、どの子どもも、先生は自分のことをどう見ていてくれるかということに大きな関心を抱いている。そんな子どもが、「学級開き」に現れた先生から自分に対する「内側に立とうとするまなざし」を感じたら、そのときその子どもにどういう思いが浮かびあがるだろうか。きっと、なにがしかの「安心」が生まれるにちがいない。

私は、子どもの言うことをすべて受け入れなければいけないとか、言うとおりにしなければいけないとかいうことを言っているのではない。どんな場合でもよりよい判断をしなければいけないのだから、そこでは教師の選択や判断がものを言うのは当然だ。けれど、その判断は、教師の権威に基づいて一方的に下すものではなく、子どもの思いや考えと突き合わせながら、子どもたちに理解と納得が得られるように決定していかなければならない。それには、子どもの内側に生まれているものが見えないと、決定したことがどれだけ妥当なことであっても、子どもを納得させることができない。そうすると不協和音が生じるにちがいない。

もちろん、不協和音は、子どもに対する「内側からのまなざし」を持っていても、生まれることはある。それくらい「内側に立つ」ということは難しいことだからである。けれども、その「まなざし」を持っている人なら、不協和音が生じたとき、そこに存在する食い違いに誠実に向き合うことができるのではないだろうか。

人の考え方は多様だ。すべての人の考えが全く同じになるということは絶対と言ってよいほどない。その違いを乗り越えるのに大切なことは「信頼」「尊敬」しかないのだ。それがあから、自分の考えと異なる場合でも、自分の考えを引っ込めることもできるし、下された決定に取り組むこともできるのだ。「内側からのまなざし」は、それほど大切なことなのである。

3 「学級開き」で大切にしたいこと

では、一人ひとりの子どもの思いとつながり合った「学級開き」をするには、どうすればよいだろうか。そのために必要なことは、子ども一人ひとりに目を注ぐ、あるいは、耳を傾ける場面をつくることである。

たとえば、「今日から、〇年〇組の始まりです。ここに集まったみんなは、大事な大事な〇年〇組の仲間たちです。先生も一人ひとりを知りたいし、みんなもお互いに知りたいよね。だから、〇年〇組のメンバーの名前を呼ぶから、『はい』と返事して立ってくれるかな」と言って、名前を呼ぶことにしたとしよう。

このとき大切なことは、ただ、返事をして立ったかどうかだけで済ませないことである。まず、どういう声で、どういう表情で返事をするかよく見ることだ。ちょっとした違いやその子らしさをとらえようと神経を集中して見ることだ。もし、子どもがどこか不安さを抱いているように感じたり、逆に、この子は乱暴な物言いをするけどなぜだろうなどと感じることがあったら、そういう子どものことは、今後、特にしっかり見ていかなければならないと気づくことになるだろう。

この時、もう一歩進めて、一人ひとりに尋ねて答えさせるということもよいかもしれない。ただし、だれでも答えられることでなければいけない。「好きな教科」を尋ねてもよいだろう。「好きな遊び」を尋ねてもよいだろう。ただし、特にないときは「ありません」という答えもよしにしておかないといけないが。そのようにすれば、子どもが一人ひとり何らかの話をするわけで、その時に語った内容だけでなく、話し方からも感じ取ることができる。

ここで教師として大切にしてほしいことがある。一つは、学級の子どもたちの目と耳が、一人ひとりの子どもに向けられるように仕向けることである。決して、何人もの子どもが見ていない、聴いていない状態にしないことである。もし見ていない、聴いていない傾向が見られたら、子どもの中に割って入って、「みんなで一緒に聴こう」と温かく、しかし毅然として誘うことである。

二つ目に大切にしたいことは、名前を呼んだ子どもの目をまっすぐに見ることである。視線を合わせられたらいちばんいい。子どもにとって、今度の先生が初対面で自分のことをしっかり見てくれたという印象が持てたらどんなによいかと思うからである。もちろん、このことは、「学級開き」のときだけでなく、今後もそうしていきたいことだけれど。

以前からその学年の子どもたちのことを知っている場合であれば、さらにもう一歩進めて、一人ひとりに自己紹介させることもできるだろう。ただ、そうするには、話がしにくい子どもがいないか、前学年のときの学級状態はどうだったかが分かっているなければならない。

自己紹介は、名前を名乗るだけでなく、今度の学年で楽しみなこととか、やってみたいことを話させることもいいだろう。少しでも子どもが話せば、それだけ一人ひとりのことが教師に分かるし、子ども同士の理解も深くなるので、これができればとてもいい。ただ、子ども同士の関係性ができていないこの日にそれを行うことにはリスクがあるということは考えておかなければいけない。たとえば、名前を言うだけで終わってもよいとか、紙片にメモっておいてそれを見ながら話すようにするとか、とにかく辛い思いをする子どもを一人もつくらぬという配慮が必要である。

これは、私が学級担任をしていた頃に行ったことだが、「学級開き」の最後に、罫線だけ印刷した用紙を配って、「〇年〇組になって」という題名で、「今度の学級のこと、友だちのこと、先生のことについて、こんなこと思ったよ、と、感じたまま書いてきて」という宿題を出した。これから1年子どもたちに書かせる日記帳を児童数だけ購入しておいてそれを配ったこともある。子どもたち一人ひとりが、この日に何をどう感じたのかを知るこの意味は大きいからである。

もちろん、この教室で過ごすことになるのは何人もの子どもたちなので、教師と子ども一人ひとりがつながるだけでなく、子どもと子どももつながらなければいけない。それは、「学び合う学び」を目指す私たちにとって欠くことのできない側面である。

しかし、それは、「学級開き」だけで行うことではない。だから、まずは、教師と子ども一人ひとりがつながることである。そして、そのつながりを基盤にして、翌日から積み上げていけばよいことだと考えたい。

ただ、ここに紹介したような「やりとり」を全員の子どものが見ているのだから、そのことによって、子ども相互のつながりも生まれ始めているだろう。どちらにしても、「学級開き」で最も大切なことは、「つながり」をつくる、その確かな第一歩を歩みだすということである。

ここまで、「学級開き」において、教師はどのようにして子どもたち一人ひとりのことを知るかというについて述べた。しかし、ここでもう一度、子どもの目線に立って考え直してみたい。前述したが、子どもたちの関心は、今度の先生はどういう先生なのか、どんな友だちとクラスメートになったのかであり、子どもの中には、新しい環境に不安感を抱いている子どももいると考えられる。その子どもたちの意識に、短い「学級開き」の時間だけでは十分に伝えることはできないけれど、できるだけことはしてやりたい。そのため、私のしたことは、少しでも子ども一人ひとりの様子が見えるようにすることだったのだが、それ以上に「〇年〇組になって」という子どもたち一人ひとりの文章に返事を書くことを大切にしていた。子どもにとって、自分が書いたことに対するメッセージほどうれしいものはないと思うからである。

「学級開き」において子どもたちは、教師のすること話すことの一つひとつから「自分たちの先生」を意識していくのだが、中でも、初対面で先生は何を話すかがかなり大きな印象をもたらす。もちろん、前述したようなことをしていれば、それだけでかなりの時間を費やすし、新しい教科書を配布したり、明日からの予定などを伝えたりしなければならぬのだから、教師がまとまった話をする時間はそれほどない。けれども、その短い話が子どもにとっては関心事なのだ。どんな先生になったかによってこの一年が左右されると思っているからだ。

とにかく、くどい話にしないことである。また、あれは駄目、これも駄目、こういうふうにしなさいと言った押しつけがましい話もしないことである。

また、いくつものことを話そうとしないことである。この1年間の子どもの学びにおいてもっとも大切にしたいことを話すのであれば、分からせようとするのではなく、これからの布石にする心積もりで、シンプルに話すことである。むしろ、それが実現できるかどうかは、教師自らのこれからの実践次第なのだと、自分事としての覚悟を持って話さなければならない。

飾らないことも大切である。上手に話そうと思わないことである。分からせようと目論むのではなく、子どもたちに伝えようと思うことである。

ただ、話すだけでなく、ちょっとした工夫をするのもよい。その際、自己満足的な気持ちで行うの

ではなく、子どもの気持ちになればこうすればきっと感じ取ってくれるだろうということで行うとよいのではないだろうか。

だれにということもなく漠然と全員に語る言葉は一人ひとりに届かない。だから、子どもたち一人ひとりの目を、あの子、この子と視線を移しながら、それぞれの子どものに伝える気持ちで語り掛けることである。そうすれば、どの子どもも、自分に語り掛けられたという感じになる。大切なのは、上から目線ではなく、子どもたちとの出会いを大事にすることである。

4 4月一か月で大切にしなければいけないこと

最後に、「学級開き」一日のことではなく、その後続く4月一か月のことについて記しておこうと思う。大切なのは、学級を「学び合う学びの教室」にすることである。

「学び合う学び」とはどういうことを大切に学ぶのかということについては、本たより2月18日号で記したとおりであるが、私は、「学び合う学び」には3つの理念があると考えている。「すべての子どもの学び」、「子どもが取り組み発見する学び」、「深まりのある学び」の3つである。この3つすべての実現に欠かせないのが子ども同士の「協同的学び」つまり「学び合い」である。

その「学び合い」のできる学級をスタートさせる、それが4月なのである。

そう考えると、子ども同士が学び合えるようにするために、何から始めなければならないか考えることになる。それは、これまでかかわってきた学校の事例から考えると、次の二つである。一つは、「分からなさ」「間違い」をこよなく大切にすること、そしてもう一つは、「聴ける」子どもにすることである。

拙著に『続「学び合う学び」をつくる～聴き合いとICTの往還が生む豊かな授業』（ぎょうせい）という書がある。その第I部は「聴き合う学びを育てる一学びを対話的に変えるために」なのだが、その第I部を「①学びは分からなさや間違いから」「②聴く力を育て、聴き合う学級にする」という順で書き始めている。それは、この順序が大切だと考えているからである。

理念の一つ目の「すべての子どもの学び」を実現するためには、その教科の学習を苦手になっている子どもが意欲的に学べなければならない。そのために大切なことは、早くできることを目指すのではなく、すぐには分からなくても粘り強く考えられるようにすることである。それには、教師が、子どもの「分からなさ」や「間違い」こそ、大切に受け止め、そこから学びが生まれるようにしていかなければならない。

何より大切なことは、そもそも「学び」は「分からなさ」から始まるものであり、「分からなさ」は学びにとって「宝物」なのだという価値観である。そして、授業においては、「分からなさ」や「間違い」に対して、こういうふうを考えるのだと示すのではなく、「分からなさ」や「間違い」が生まれている個所を取りだし、その部分に寄り添って考えていくことだ。それは、多くの場合、「分からなさ」や「間違い」の傍らに「学びのツボ」があるからである。

「宝物」「学びのツボ」という考えを教師が持って子どもたちの学びに当たっていけば、そういう学びの蓄積の中で、子どもたちもそのように考えるようになる。そうすれば、この考え方が、学級全体にいきわたっていく。そのとき、それは、学級の文化になるのではないだろうか。

理念の二つ目は、「聴き合う学級にする」ということである。ここで大切なことは、「話すこと」よ

りも、「聴こうとする子ども」にすることである。話すことよりも聴くことを大切にするのは、他者の考えに耳を傾け自分の考えと引き比べることによって学びを深めることができるからである。「よく学ぶ子どもはよく聴く子ども」だと考え、「聴かなければいけない」「聴きたい」という意識を醸成する、それが一年の出発である4月でもっとも大切にしなければいけないことである。

では、どうすれば「聴ける子ども」にすることができるのだが、まずは、教師が率先して子どもの言葉に耳を傾けることだ。その教師の姿が子どもの目に焼き付くし、教師によって自分のことを受けとめてもらった子どもの心には、聴いてもらったうれしさが生まれる。「聴く」という行為が感覚的なものなのだから、それが養われるには、聴いてもらったことの喜び、聴いたことによる深まりを実感するという感覚的なものが何よりも大切なのだ。

もちろん、「聴ける子ども」にしていくための方策がないわけではない。その方策をとれば、どこのどんな学級でも聴けるようになるというものではないけれど、そうすることの趣旨をはっきり理解して、中途半端ではなく徹底してそのようにすれば、それなりに「聴ける子ども」は育っていく。その方策は、「ペア」で聴き合うことである。

「対話」の原型が「二人の人がことばを交わすこと」(広辞苑)であることを考えると、ペアで聴き合うことを習慣化することは必須である。ペアだと、二人が同時に話すということにはならず、どちらかが話してどちらかが聴くということになる。しかも、すべての子どもが話したり聴いたりすることになる。だから「聴いて学ぶ」感覚が養われるのは「ペア」だと考えたほうがよい。当然、小学校中学年以降は、ペアだけでなくグループの学びも重視していくことになるのだが、そのグループもペアが十分にできないのでは十分な「聴き合う学び合い」にはならない。

さらに方法的なことをもう一つ。それは、聴く学びができたとき、それを子どもたちが自覚したり、そのことの価値を感じたりできるような手立てをとることである。ペアで聴いたこと学んだことを言わせるのも書かせるのもよいだろう。とにかく、「聴くこと」はこんなにも大切なのだ、聴くとこんなにもよいことがあるのだと感じ、「聴こう」「聴かなければ」という意識を高めることである。

4月に大切にしてほしいこととして、「分からなさ」「間違い」は宝物という価値観と、「ペア学び」を徹底して「聴くことの大切さと良さ」を実感することだと述べた。もちろん、それを実践化するのはそれぞれの教師である。そのための方法は、その学級の子どもの実態に合わせて考えてほしい。どちらにしても、教師の熱意が子どもに伝わらないと具現化できないと考えるべきである。

本稿最初の方で述べたことだが、「すべての子どもが秩序正しく整然と学習する」ことは、私もそうならばよいと思う。しかし、それは、教師の指示によってそうするようにするのではなく、学ぶ子どもたちの内から生まれてくるのが本物だ。それには、子どもたちの考えを見つめ、子どもたちとコミュニケーションを取りながら、子どもたちとともに突き詰めていくべきではないだろうか。OECDの「生徒エージェンシー」に「自らが責任を持った判断や選択を行う生徒像」が示されているが、それに適うようにするには、私たち教師は、子どもの考えにもっと目を向け、子どもが取り組むようにしなければならない。大切なのは、そのための教師の「まなざし」と実践なのだと思う。

4月は出会いの季節。その出会いを、つながりをつくり、それが「学び合う学級」の形成につながるかどうか、それはひとえに教師の対応にかかっている。「始めよければ終わりよし」となるかどうか、いよいよ新学期が始まる。